

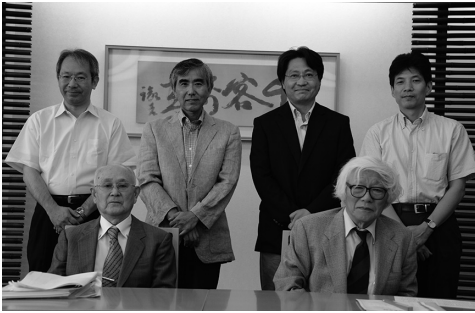
Title	福沢研究センターの「これまで」と「これから」
Sub Title	The Fukuzawa memorial center for modern Japanese studies, Keio University : looking at the past and the future
Author	小泉, 仰(Koizumi, Takashi) 坂井, 達朗(Sakai, Tatsuro) 小室, 正紀(Komuro, Masamichi) 米山, 光儀(Yoneyama, Mitsunori) 岩谷, 十郎(Iwatani, Juro) 平野, 隆(Hirano, Takashi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2013
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.30, (2013.) ,p.1- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：慶應義塾福沢研究センター開設三十年#座談会
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20130000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

座談会

福沢研究センターの「これまで」と「これから」



前列左より、小泉仰、坂井達朗、後列左より、米山光儀、小室正紀、岩谷十郎、平野隆（敬称略）

【出席者】

小泉 仰（こいずみ たかし）
慶應義塾大学名誉教授

所長在任期間…一九八七（昭六二）年四月～一九八八（昭六三）年九月

坂井達朗（さかい たろう）
慶應義塾大学名誉教授

所長在任期間…一九九六（平八）年一〇月～二〇〇三（平一五）年九月

小室正紀（こむろ まさみち）
慶應義塾大学経済学部教授

所長在任期間…二〇〇三（平一五）年一〇月～二〇〇八（平二〇）年九月

米山光儀（よねやまみつり）
慶應義塾大学教職課程センター教授

所長在任期間…二〇〇八（平二〇）年一〇月～二〇一二（平二四）年九月

岩谷十郎（いわたにじゅうろう）
慶應義塾大学法学部教授・福沢研究センター所長、司会 所長在任期間…二〇一二（平二四）年一〇月～

平野 隆（ひのの たかし）
慶應義塾大学商学部教授・福沢研究センター副所長・『近代日本研究』編集長、司会補助

岩谷 おはようございます。本日の司会を務めさせていただきます福沢研究センター現所長の岩谷でございます。今日は歴代所長の先生方にお集まりいただき、開設三〇年を迎えたこの福沢研究センターの歩みを振り返り、さらに未来を展望していただくという、たいへん大がかりな内容の座談会になるかと思っています。

一九八三年（昭和五八年）四月に創立いたしました福沢研究センター、それ自体が義塾創立一二五年を記念する事業の一環として表れたものでございます。そこで、まず小泉先生、坂井先生、小室先生、米山先生という順番で、それぞれの先生方が所長をお務めになられたときの大きなイベントを中心に、その当時を振り返っていただければと思います。

小泉先生におかれましては、一九八七年（昭和六二年）四月から約二年間に亘りセンター長でいらっしゃいました。先生のセンター長の頃は、一〇年目を迎える直近だったと思いますが、最初の一〇年を草創期の研究センターと位置づけるならば、どのような雰囲気、風景であったのかというところから、少しお話をいただければと思います。

センター草創期の頃

小泉 私は河北先生と一緒に文学部のほうから委員として、最初は就住しました。そのときには石坂さんが第一代所長で、その次の所長は河北さん、私は三代目になるわけです。三代目になると、たいいていこの企画でもダメになるということですが。

私の場合は確か一年か一年半くらいの任期ではなかったかと思いますが、内山さんという非常に優れた副所

長が開所当時からおられました。したがって全部おんぶにだっこので、彼がほとんど企画をなさった。石坂さんのときも、そうではないかと思うのですが。私は就職時には商学部所属で、一九六七年に文学部に移ってまいりました。ですから、石坂さんとも非常に親しくさせていただいております。私の次の所長に内山さん、その次が西川さんです。西川さんも商学部で、非常に親しい方ばかりが所長を担当しました。私は何をすることもなかった。

ただ一点、申し上げますと、センターには研究者が一人もいなかったわけですね。だから各学部から研究者が集まって研究会を行う。そういう趣旨で始まったのですが、しかし三代目になり、何とか研究所員を設けるべきではないかという意見が非常に強くなりました。あのときの理事の名前を忘れてしまったのですが、何とおっしゃいましたっけね。確か退職後は軍閥系の学校の校長になられた方ですね。その方のところに相談に行き、センターで研究者を一人でもいいから設けるということを交渉した……、あるいは交渉させられたわけです。一年半と短い間でしたが、これが私のいちばん大きなことではなかったかという気がいたします。

私自身は実を言うと、所長なんかになりたくなかったのです。どうしてかといいますと、ちょうど河北さんとお辞めになるときに一年間、研究の休暇をいただきまして文学部で承認を受けました。さらにまたケンブリッジとの交換教授制度で、六か月いられるという許可をいただきました。最初は私の研究室に河北さんが来て、河北さんの残りの六か月を私に代わりにやってほしいということでした。私は嫌だと断ったのです。河北さんは非常に気の弱い方ですから、私が断ったのでそのままお戻りになりました（笑）。こっちは助かったと思っただけですが、その次に内山さんが来ましてね。この方強硬派なんですよ（笑）。所長役は文学部で河北さんが担当している、ならば次の六か月の分はあなたがやらなければいけない、義務だと言うんですね。すったも

んだやりまして、これは私にとっていちばん大きい。一年間の研究休暇はだめになり、ケンブリッジとの交換も危なくなってきた。冗談じゃない、センター委員をやめようかとも思ったのですが、まあまあ、ということとその理事と相談して、九月まではイギリスに行ってもよろしいという話し合いで終わりました。

実際に所長に就いたのが、帰国後この年の九月でした。そして翌年四月までの六か月の間、河北さんの代わりを務めるということで担当いたしました。そのあとどうしますかと言うから、四月から九月までを新しい任期としてお引き受ける。そのあとを内山さんに担当していただく。そういうお話になりました。ですから私の短い中でいちばん大きいのは、やはり西沢（直子）さんを研究所員として設けることができたということではないかと思います。

それからもう一つは、あの当時研究会といいますが、他の大学の先生をお招きして講演をしていたことがありました。講演を杉原四郎先生にお願いしたのです。

イギリス哲学会会長の杉原さんとは親しく、私は学会の常任理事でして、先生とはツーカーの仲だったものですから、内山さんに頼まれてお願いしましたらばお引き受けいただけました。とてもいいお話をしてくださりましたが、そのときにある方が優れた質問を長時間、杉原さんになさったわけです。一時間半ぐらいディスカッションが延びましたので、杉原先生はちょっとお体が弱いですから大丈夫かなと思っていました。

するとその晩に、杉原先生は倒れられてまして警察病院に入院なさり、私は驚いて翌日お見舞いに参りました。それから三年ぐらい療養なさいました。私が責任をもってお招きして、病気にかかせてしまつて死因をつくつたというので、本当にそのときは責任を感じました。今でもそうですけれども、本当に申し訳なく思つた次第です。これが非常に大きいですね。私はケンブリッジから帰り、九月から一年ぐらい實際上の所長を務めさせ

ていただきました。しかし、ほとんどが内山さんにやっていただいたようなものでした。内山さんはプラン作成など非常にできる方ですから全部やっていただいて、私はただ司会をするだけということでした。

私は福沢諭吉の思想に対して非常に関心を持っていたものですから、辞めてからいろいろとやりました。差し上げるこの論文は「University of Nottingham」という、英国の大学で講演を頼まれたもので、『Asian Philosophy』という学会誌に掲載して貰った論文ですが、一部ずつ差し上げます。外国に向かって福沢思想を紹介するということをやりたいと思います。

あと一つの論文は、一九九五年六月一日中国の北京日本学研究所に行きました時に、しゃべらされた福沢諭吉の女性論であります。私はこういう外国への宣伝をやりたいと思います。

話は変わりますが、私はキリスト教に深い関心を持っています。三代目のクリスチャンの家庭に育っておりますので、聖書研究をずっとやっております。福沢研究の他に聖書研究をやっております。二〇一一年にICUの「キリスト教と文化研究所」で講演させられて、それを出したものがありますので差し上げます。こんなこともやっているということです、これは八四歳ぐらいの年に書かせていただいたものです。本当を言うと皆さん方に、福沢研究センターでもって内山さんに頼まれて出版することができた、『西周と欧米思想との出会い』を一冊差し上げようと思っていたのですが、袋に入れますと重たくて持てない。二冊だけ持ってきましたセンターに預けます。私のやっているのはそんなことでありまして、センターと深い関係があるかないか自分でも迷いますが。しかし、センターを土台にして福沢研究が行われた。そして海外で宣伝をしたということがあります。以上です。

岩谷 先ほどこの会場に来るときに先生がご自身を三代目とおっしゃったのは、クリスチャンのご家庭で三

代目だったのか、それとも所長として三代目という趣旨だったのか。

小泉 両方です。

岩谷 両方かけておられたんですね。今やっとわかりました（笑）。内山先生のお名前がたびたび登場しますが、センター開設翌年の一九八四年から副所長でいらっしゃった内山先生の企画・主催の下で、「センター連続講演会」が開かれてまいります。小泉先生の所長時代もちょうどその頃で、お話しにありました杉原先生を初めとして塾外の研究者との交流をも活発にしていこうとの方針があったものと思われます。ありがとうございます。

没後百年事業とセンター

岩谷 坂井先生の中には「没後百年」、あるいは「世紀をつらぬく福沢諭吉」展のご準備が西川先生のと
きから始まって、先生のところで没後百年書簡集刊行の大事業が始まりましたが、お話をいただければと思
います。

坂井 私はそれまでは福沢研究とは、全く無縁の生活を送ってきた人間でした。塾内におれば何程かの関係
が生まれていたのですが、卒業して長いこと他校におりましたので、そういう機会もありませんでした。
ただ私が塾に帰ってきたときに、先ほどもからお名前の出ている内山先生が、「福沢門下生の地方での活動」と
いう共同研究を始められ、地方へ行つて卒業生の足跡を調べてくれることが必要になりました。文学部の中井信
彦先生の後へ私は参りましたので、中井先生から「福沢センターのことも、少しは手伝えよ」と言われており

ましたので、お手伝いをするということになりました。それがきっかけで、センターへ伺うようになりました。

そのうちに内山さんが地方の学校へ移られるというので、西川先生が所長になられて、私が副所長ということになりました。西川先生は、かなり長く所長をなさっておられたと思いますが、そのうちに心臓を悪くされて緊急入院されました。所長の任期は二年ずつですが、それは西川所長の何期目かの任期の、一年半をすぎた時でした。ですから、あと半年で期限が来るというときだったと思います。急に入院をされました。そこで誰かに所長をお願いしなければならないということで、担当理事に相談に行きましたら、「おまえが副所長をやっていたのだ。副というのは、ふだんは用事がないが何か緊急のときに所長に代わるためにある職なんだから、おまえが半年間代わつてろ」と諭され、まあ半年位ならと軽く考えて、後任を引き受けました。

ところがその半年の間にとんでもないことが起こり、私のもくろみは水泡に帰しました。ある日突然塾監局から呼出を受けて、何事かと思つて出頭すると、「来たる二〇〇一年に福沢先生の没後百年の記念行事を行うことになった。ついでには福沢研究センターでは記念事業として何を考えているのか」という質問です。事前に何の相談もなく、藪から棒にそんなこと聞かれても返事のしようもないのですが、実はその前年の中頃から、没後一〇〇年の記念としてセンターが行うべき事として何がふさわしいか、関係者の間で密かに模索を始めていました。その中でいくつかの試案が出されたのですが、そのひとつに、現行の『福沢論吉全集』刊行以後に発見された新史料としての福沢書簡を含めて、全書簡を時系列に配列し直し、詳しい解説をつけた『福沢論吉書簡集』を編纂するという案も出されていました。

しかし当時のセンターの実情は、未だ専任の研究員もなく、事務体制も貧弱であり、また予算規模も小さく、とてもそんな大きなプロジェクトをこなせる状態ではありませんでしたので、この計画は言わば画に描いた餅

に過ぎません。その点をよく説明して、「これを刊行すれば、確かに学問的意義は大きいが、センターの現状ではとても無理である」と返答しますと、塾監局は「必要な金や人の手当はするから是非やれ」ということで、私は半年後には所長をやめる予定でしたのですが、結局書簡集の刊行が終わるまで、またその頃もち上がった書簡集の簡略版である『福沢諭吉の手紙』の刊行が終わるまで七年間は逃げ出せなくなっていました。

第一巻は計画通り二〇〇一年二月の没後一〇〇年の記念式典に合わせ、一月二三日刊行されました。出発時点での計画では二か月に一冊ずつ出していく予定でした。しかしこれは完全には守れないで、三か月目にかかったことが二回ぐらいいりましたが、ともかく二〇〇三年一月までに全九巻を刊行して責任を果たしました。幸いなことに福沢の書簡に関しては、慶應義塾に研究の積み重ねがありましたから、それに寄りかかってどうやらできたというところです。

学校が編集委員会顧問に指名されたのは、この間亡くなった服部禮次郎さんでした。服部さんにずいぶんお世話になりました。例えば新資料が古書店に出る。福沢センターの予算ではとても買えない。そのときには塾監局へ行って、担当理事に予備費から出してもらうことをよくやっていました。しかし、それもできないときがありました。そういうときには服部さんに「すみませんが、買っておいていただけませんか」とお願いすると、「いいですよ」と（笑）、買っておいで下さいました。また、『書簡集』刊行の終了に近づいていた頃、服部さんの「和光」のビルで、展覧会「世紀をつらぬく福沢諭吉」が開催され、センターもこれに協力しました。この展覧会は評判がよくて、東京だけではなく関西でもやろうということになり、西沢さんと私が行きました。確か岩谷さんも一緒にしましたね。

岩谷 はい。私も大阪のデパートの展覧会に行ったことを覚えています。

坂井 それです。阪急デパートでしたね。

岩谷 催し物会場の階でしたね。他の所員の先生方と一緒に輪番で詰めていたことを思い出します。

坂井 服部さんのところでやったときに、明日開くというオープニングセレモニーの前の日に、えらく雪が降って大変な思いをしました。それと福沢先生が大病から回復されて、すぐに書かれた「独立自尊迎新世紀」という軸。あれは美沢進さんの子孫からいただいたのですが、ちょうどそのとき手に入って展示に間に合って嬉しかった覚えがあります。福沢先生の字は人によって好き嫌いがあるようですが、あの軸字をいいと言わない人には今まで逢ったことがない。大病の後とは言うものの、実にいい字ですね。

その展覧会のときに、私が担当した部分が『修身要領』についていろいろな人が発表した評論を特集しました。その中で幸徳秋水のものが面白いので、大きく展示で紹介をしました。そのときはよもやそういうことになると思わなかったのですが、ふたを開けてから天皇陛下が見に来られることを知りました。幸徳秋水は陛下の御祖父父様の暗殺を計画したと言われた人です。これはちよつとまずかったかなと思ったのですが、もう間に合わない。初めから言ってくれば、もう少し考えたかもしれないけど。見に来られて、いきなり幸徳秋水が出てくるんじや、陛下もギクツとされるんじやないかと思いますが、ああいうお方ですからその素振りもお見せにならなかったの、あれでよかったのかなと（笑）。あれはまずいというか、具合が悪かったかなあと思ったことを覚えています。

岩谷 この座談会のために事務局の用意した資料が先生方のお手元にあると存じます。その中に、「福沢研究センターにおける内山秀夫先生」というコピーがございますが、これは坂井先生からぜひとも配ってくださいというお話でした。内山先生のこの追悼文は、どのような趣旨でお持ち頂いたのでしょうか。

坂井 福沢センターで『書簡集』であまりくたびれてしまったものですから、定年より一年前に学校を辞めてよそへ移りました。そしたらじきに内山さんが亡くなって。先ほど小泉先生から、多方面に活躍される優れた方だとか紹介がありましたけれども、あの方には、正しいと信じた方向に一直線に進んで他を省みないところがありました。僕らは冗談に「まるで魔王のような実行力だ」などと言っていました（笑）。とにかく熱心な方でした。

彼は福沢センターを慶應義塾の中だけの研究所でなしに、塾外に開かれた研究機関にしたいということを強く考えられたわけです。そこでその豊かな人脈に沿って日本中から福沢に関心を持つ研究者を招いて仲間になっていただきました。北大におられた松沢弘陽さん、東京都内では東大の石田雄さん、坂野潤治さん、明治の橋川文三さん、早稲田の佐藤能丸さん、先ほど小泉先生のお話にあった杉原四郎さんや杉山忠平さん、新潟国際情報大の區建英さん、西のほうでは同志社の西田毅さん、沖縄の我部政男さんなどがそうして集まってこられた。『福沢書簡集』の際にも、学内だけではなく南山の川崎勝さん、法政の飯田泰三さんなどに編集委員に入っていただけなのは、やはり内山さんが福沢センターを外に向かって開く姿勢をつくっておいてくださったからでしょう。そういう点では非常にありがたかった。内山さんの実行力がなければ、そういうことはなかなかできなかったと思います。

『書簡集』の編集について言えば、顧問という肩書きではなかったのですが、編集委員会の言うなればお目付け役のような感じでご指導と非常に適切なアドバイスをいただいたのは、塾の先輩であり、また岩波書店の総編集長をされておられた竹田行之さんでした。

岩谷 大変ご尽力頂きましたね。

坂井 岩波書店と慶應の間の架け橋になって、実によくやっていたきました。特に担当に沢株正始さんというベテラン編集者を選んで下さったのが大きかった。いま体調を崩しておられるようですけれど、またお元氣になって頂きたいと思っています。この間、福沢協会の行事があつたのですが、それにもお顔をお見せにならなかった。ちよつと心配をしているのです。

岩谷 この間の土曜日に福沢論吉協会の土曜セミナーがございまして、東大の史料編纂所にいらっしゃった宮地（正人）先生がご発表されました。小室、米山両先生もいらっしゃっていましたが、宮地先生のお話の冒頭で、『福沢論吉全集』と『書簡集』に感謝を述べられていたことが印象的でした。センターの『書簡集』編集・刊行のお仕事、慶應を越えて多くの研究者に被益するところ大であることが確認されているということ、私自身、大変に喜んでおりました。

創設二〇年を迎えたセンター——専任教員体制の確立

岩谷 小室先生のとくに創設二〇年を迎えるわけですね。

小室 創設二〇年については、確かシンポジウムか何かを行っただけで、その他は何も、ほとんどやりませんでした。

坂井 いやいや……。小室先生のことには非常に大きなことをやっていたきました。小泉先生が専門の연구원がいらないから、これを置くようにと働きかけていただいて、それで今の西沢教授がそれになりました。実はあの時はまだ囑託で、しかも有期でした。これが小室先生の時代に正規の福沢センターの准教授になった。

あれはすごい、あれが突破口でした。有期だと三年たつと切られてしまうわけです。そうすると……。

小室 いや、その前提には坂井さんが交渉してくださって、有期嘱託だけれども解雇はしないという口約束は取っておいていただいたことが大きな意味があります。

坂井 ええ、私は辞める前にそこまで切り込めたわけです。その前は三年たつと切れてしまう。そうすると一年間休みにならなきゃならない。その間の手当は何とかするとしても、実際には大変なんですね。社会保険の問題もあるし、ご本人の経歴上不利な問題が多々ある。あの頃から有期教員というのがそろそろ顔を出してきて、それは小室さんのときには……。僕が辞めて一年たたないぐらいのときでしたかね。

小室 そうですね。

坂井 それを聞いて「小室さん、でかした！」と、思わず叫んだ記憶があります。あれはよかった。新しい枠を作るのは大変だけれど、一度ああいう枠ができちゃえばね。それを大きくするのは比較的簡単です。都倉（武之）君のケースも、それにあたるでしょう。だから小室さんの功績はセンターにとって絶大です。

岩谷 西沢さんのお働きはそれ以前からずっとあつたわけですが、やはり一五〇年事業が大きなきっかけだったのでしょか。

小室 それがなければ、ちょっと難しかったかもしれないですね。

岩谷 そのあたりのことから、小室さん、お願いします。

小室 僕が就任した時には、その前に坂井さんが確か七年間所長をなさって、研究所として学術的な業績を固めてくださった。特にいちばん大きいのは『福沢書簡集』という、学界でも高く認められるものを出したことだと思います。

しかし、坂井さんの後を引き継いだ当時は、センターの体力としては、さらに続けて『書簡集』に匹敵するような学術業績は、とても出せない状況でした。しかも、目の前には創立一五〇年が迫っていて、その周年事業にどう対応するかを考えておかなければならない。就任は二〇〇三年秋でしたから創立一五〇年は五年後。例えば学校の周年史みたいなものを出すとすれば、すぐにでも取りかからなければならぬ時期です。

この問題への対処は、実は坂井さんのときから、松崎欣一さんをキャップに委員会をつくって検討は始めていました。福沢研究センターは研究員としては有期嘱託がかるうじて一人いるだけの組織でしたが、そのような周年事業の時には、「福沢研究センター」という組織があるのだから、例えば一五〇年史のような記念刊行物はそこが担当するのが当然だ」という意見が塾内に起こることが予想されてました。これに對して、「センターは予算も人員も無いので、とてもそういうことは出来ません」とお断りするという対応もあり得ますが、その時には福沢センターは組織として意味がないと見なされ、場合によっては実質上潰されることを覚悟しなければならぬ。

そこで松崎委員会の時から、センターの体力で可能なことは何かを検討し始めていたのです。おそらく塾監局は直前になって一五〇年史みたいなものの刊行を求めてくるだろうと予想しました。だけれども資料の整理時間の点からも、財力や人員の点でも難しい。そこで、それに代わる幾つかの案が出ていました。いま実際に行われている「一五〇年史資料集」は、案としてすでにそのとき出ていました。

つまり、私の時の課題は、一五〇年の事業が前に控えていて、それに巻き込まれすぎではだめだし、かといって超然としているわけにもゆかず、その事業の中でいかに福沢研究センターとして自立してやっていけるかを考えなければいけないということでした。

坂井さんの御仕事が『書簡集』というアカデミックなものであったのに比べると、私がやらなければならなかったのは一五〇年という嵐の中で、福沢研究センターの本質をいかに維持するかという、どちらかというと行政的な仕事でした。

いずれにしても一五〇年事業の中で為すべき事は果たさなければならぬ。ただ、それには、有期嘱託が一人いるだけではどうしようもないということでした。そもそも周年記念刊行物のようなものは学術上の業績になりにくいものです。そのような仕事に、雇用も保障してない有期嘱託員に人生のかんりの時間をかけて取り組んで下さいとは言えません。どうしても専任研究員を置かなければ、一五〇年事業も分担できない。

また、もっと本質的な問題として、福沢研究センターが本来の研究目的にふさわしい組織になるためには、兼担所員の核になり継続性を維持する専任研究員がどうしても複数名必要だということは明らかなことでした。それですぐにいろいろ打診を始めたのですが、ハードルは非常に高い。塾監局の方針は、「新たに研究所に専任研究員は置かない」というのが、確固とした基本でした。実際に、斯道文庫などは特殊な事情で研究員はいましたけれど、多くの研究所は、今でも専任研究員はいません。しかも、そもそも福沢研究センターを設立した時に、専任研究員は置かないということが条件になっていたようで、そのこともしばしば言われました。そこでどういうふうにしたらいのかというのが悩みの種で、教務に相談しても、塾監局人事部に相談しても、担当理事に話しても、いずれも難しいということでした。

ただ、その相談の中でヒントになることがありました。一つは、福沢研究センターが日頃どのような仕事をしているか、嘱託の西沢さんがどんなに多くの仕事を抱えているかを、塾内の人々が殆ど認識していないということ。つまり、『書簡集』のような素晴らしい仕事をしているにもかかわらず、塾内での福セの存在感がきわ

めて薄いということです。もう一つは、専任をおけない理由として、「教育をしてない」からということ言われたことです。

そこで、副所長であった岩谷さんとも相談して対策を立ててゆきました。最初の問題については、できるだけ皆さんに理解していただくように、News Letter を創刊し、また所員には福セが行った仕事を「彙報」として知らせることを始めました。内山先生から外部講師を招いた講演会を活発に行うように言われていたこともありしたので、できる限り講演会やセミナーを開催し、しかも必ずポスターを掲示しビラを配るようにし、組織としての存在感を拡大するように努めました。品がないといえば、その通りですが、理解してもらうには必要なことでした。

講演会やセミナーの頻繁な開催は、一方で一五〇年事業の準備も始めてましたので、時間的にかなり負担ではありましたけれど、近代日本研究のセンターとしてのアイデンティティを維持する上でも有意義だったと思います。また、内山さんが「慶應は有り難い所で、演説館での講演を外部の方にお願いに伺うと、安い講演料にもかかわらず、どなたも喜んで引き受けて下さる」とおっしゃってましたが、初対面の私がお願いにいっても一つの例外もなく皆さんお引き受けくださいました。

話がずれましたが、第二の「教育をしてない」という問題は、福セとしても前々からの課題で、設置講座をそろそろ持たなければということは所員の間で言われていました。あまり慶應ナシヨナリズムのような形で福沢先生のことを褒めそやして塾生に教えるのは問題ですけど、やはり福沢論吉は近代日本における非常に重要な人物ですから、それを塾生が全く知らないというのも困ったものです。そういう点では、福沢論吉や慶應義塾を視野に置いた近代日本についての講義があってもいいだろうということは、所員の間でもしばしば言わ

れていたことでした。

そこで、岩谷さんと相談して、まずは設置講座を始めようということになったのですが、これがまた簡単にはできないのです。というのは、福沢研究センター規定の「目的」の項に「教育」が入っていない。だから福沢研究センターが設置講座を開くのはダメ、できないと、教務が認めてくれません。そこで仕方がないので、最初の年度（二〇〇四年度）は、実質上センター講座に相当するものを開いてしまえということで、経済学部の講座として「近代日本と福沢諭吉」を開講し、その講義に西沢さんにも出講してもらいました。最初の講義担当者は、西沢さんの他には、岩谷さん、小野さん、樽井さん、松崎さん、平野さん、それに小室だったと思います。全員福沢研究センターの所員で、実質上福セの講義でした。

こうした既成事実をつくって、福沢研究センター規定の「目的」に「教育」を入れることを目指したのですが、それでも、なかなか簡単には認められませんでした。その点では担当理事や教務部などといぶん相談をして、だんだん相談をしているうちに教務部もいろいろとアドバイスをして下さり「こうすれば入れます」とか教えてくださいました。そして結果的には、目的のところに「教育」を入れることができました。その改訂規定を基に、さっそく新たに福沢研究センター設置講座を企画し、米山さん、岩谷さん、平野さん、牛島さんにもご担当いただいて、西沢さんにも福沢研究センターの非常勤講師として講義を担当してもらうという形にした次第です。

その一方で一五〇年のことを分掌するには専任研究者員が必要だということを、ことある毎に唱えつづけました。例えば、ちょうどそのとき私は学部から出た評議員だったものですから、塾外の評議員からもバックアップしていただきたいと思い、ちょっと乱暴だったのですが、評議員会の席上で一五〇年の事業の問題が出たと

きに、直接関係はなかったのですが、「一五〇年の事業ではかなり福沢研究センターが仕事を担う。だけれども専任研究員が、実は福沢研究センターにはいない。今の状態では組織の名前だけはあっても、担当力は弱い。専任がいなければ一五〇年事業はとても分担できることではありません」。そういったことを評議員会で発言しました。こんなこともあり、次第に風向きが変わってきたような気がします。ですから一五〇年ということが必要ならば、なかなか難しかったことでしょうね。

ただ、この件で忘れていけないのは、こちらの持っている具体的な「カード」が西沢さんだったということも、極めて大きかったということです。通常は、制度ができて、さて誰を採用するかとなるのですが、この場合は西沢さんがいて、はじめて進んだ話です。塾内の関係する殆どの部署の人が、西沢さんなら、ということでも最終的には制度を創ることに協力してくれました。西沢さんの能力と人柄があつてはじめて専任研究員設置が可能になったと言えます。

また、そのことは都倉さんの採用に関しても同様に言えることだと思います。都倉さんの採用は一五〇年記念事業で、記念出版に加えて展覧会を行うという話が出てきて、それがやはり追い風になったことは事実です。しかし、その時に都倉さんという「カード」を出せなかったら、専任の二人目の採用は難しく、嘱託が有期研究員の増員ぐらいで終わつたと思います。実際、ぎりぎりまで有期で良いのではないかという話は強かったです。都倉さんに関しても、能力、人柄には全く異論を唱える方がいないということがやはり大きかったです。

岩谷 ありがとうございます。西沢さんが二〇〇五年に助教授として正規に教員として採用され、都倉君の専任講師採用は、その二年後でしたね。

小室 そうです、そこらへんはバタバタと。

岩谷 ありがとうございます。お二人の専任教員を迎え、一五〇年事業の計画立てやそれを実現してゆくための陣容作りが、「バタバタ」と、しかし着実に仕上がっていった。小室先生のところで構築された体制を電車のレールといたしますと、次の米山先生のときにまさにそのレールの上を大きな電車が通り始めたというか、そうした成果が次々と世に顕されてゆく時期かと思います。こちらにも持っていました。二〇〇八年に『義塾史事典』、二〇一〇年に、福沢の生誕一七五年もかぶさっての『福沢論吉事典』がそれぞれ刊行されます。米山先生、いかがでしょうか。

義塾一五〇年・生誕一七五年記念事業

米山 小室さんのときに、西沢さんと都倉さんを探ってもらいました。そして一五〇年史資料集の枠組みも全部作ってもらっていて、『義塾史事典』は小室さんが最後の最後のところまでなさって、実際に出たのがたまたま十一月の式典のときなので、所長が替わっていたということだと思います。『福沢事典』についても、すでに小室さんのときに編集委員会を立ち上げて動き出していました。さらには展覧会についても、実際にはもう動き出しているときに所長になったので、何もすることなしにさまざまなが動いていたと思います。ただ専任の負担はすごく大変で、二〇〇八年の最初ぐらから二〇〇九年いっぱいくらいまでは、一つ終わると、すぐ次なんです。展覧会が終わるとすぐに『福沢事典』になりましたから、二〇一〇年までは本当に福沢センターは、夜中も電気が消えませんでした（笑）。一二時くらいになると、キャンパスから出て行って

くれと追い出されるのですが、最後は守衛の人もあきらめたみたいで、何も言われなくなって。これは言っていないことですかね、守衛さんが怒られてしまう（笑）。

そんな状況でずっとやっていて、専任の人たち、主に西沢さんが中心になって、展覧会には都倉さんも加わってやっていていたわけですが、大変な状況の中で一つひとつクリアしていったのが実状ではなかったかと思いますが。一五〇年の事業があつて専任化がうまくいったのですが、逆に彼らを研究者としてどういうふうに遇しているかがすごく問題だと思います。一五〇年事業をやっている時に、一五〇年事業をやるために専任になったのだから、研究というよりもそちらの仕事をするのが当然だと考えられ、いわばイベント屋みたいな形で位置づけられて動いていたように思います。そこがいちばん大きな問題として、僕の時にはあつたと思っています。

ですから小泉先生が所長をやった初期の頃のような、講演会やセミナーといった研究上のことを、ほとんどできずに終わってしまったことが大きな問題だったと思います。二〇一〇年末で一応二つの別巻が終わって、第一巻はもう少し楽にできるかと思っていました。コンセプトはしっかりしていましたし。ところがやり出すと、いろいろな問題が出てきて、結局刊行されたのは岩谷さんが所長になってからと少し遅れてしまいました。その間も専任の所員がかかりきりという状況でした。一五〇年史資料集を作り続けながら、彼らの研究時間をどういうふうに確保していくかというのが、これからの課題になってくるだろうと思います。

小室 米山さんは、あの大きな展覧会を東京と……。

米山 福岡、大阪、神奈川ですね。

小室 大変だったですか。

米山 いや、僕が何かしたわけじゃないんですが。とにかく休む暇がなかったし、最後は時期が大阪と神奈川と重なっていたので、それは大変でしたね。大阪と神奈川はコンセプトが違うものでしたから。

小室 同時に二つの展覧会を。

米山 そうですね。全く別なものを二つをやっていたので、大変だったと思います。せっかくやるのだから多くの人に見てもらうように、本当は招待券などをもうちょっと配れるといいなと思ったのですが。一五〇年事業の収支のこともあったので、そうもいきませんでした。それは『塾史事典』もそうですよね。

小室 配布が少ないんですね。

米山 はい、買ってもらおうというスタンスなので。作って、できるだけ読んでもらうことに意味があると思うのですが。そのところが一五〇年事業と考え方にズレがあったように思います。

小室 『福沢事典』の予算についてもずいぶん交渉されたと聞いていますが。

米山 いえいえ。

小室 資料集も予算の点でご苦労されたそうですね。

米山 資料集は活字ではなくて、最初からデータだけでと言われたりしました。活字になってないとそのあと直したりするのも、実際にはやりにくいので、一回は本の形にしないと次に進めない。今は二巻の編集をやっています、一巻のほうの修正を含めた仕事は現在もやっているわけですね。今、二巻を都倉さんが中心でやっていて、一巻の修正は西沢さんがまだ関わっているという状態です。だから一巻を出せば、それで終わりということではないですね。おそらく一五〇年史資料集は続いていきますから、都倉さんは若いですけど、たぶん彼が定年のときにもまだ終わってない（笑）。終わってるかな？

小室 わかりませんね。

米山 ずっとそれをやっていくわけですよ。そしてさらに仕事は、増え続けているわけです。お金がつかないいいことですけど、どうしても仕事が増えていく部分があります。僕の中には小泉基金からの研究補助と、教育では未来先導基金で中津に行くことが始まりました。今は「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトで寄付があった、と聞いています。そういうものがどんどん増えていくという状況だと思います。

センターの「カルチャー」——その総合性と自立性

岩谷 ここまでは周年事業を中心に、それぞれの先生方に振り返っていただきました。お話を伺う限り、各所長同士の間で、前の代から次の代へと、バトンの受け渡しが実にスムーズになされていたとの印象を抱きました。そうしたスムーズ感というのは、何か福沢研究センター独自の「カルチャー」のようなもの、たとえば「親分子分的なつながり」がそこにあつて可能になったのでしょうか（笑）。

小室 それはいいですね。

小泉 私の感じでは何よりもいろいろな学部の人が集まってきて、インターナショナルという言葉は使えないけれど、インターディパートメンタルな雰囲気が強かったんじゃないかと思います。ですからお互いに人格的に平等という感じが強かった、内山さんを除けば（笑）。お互いの交わりは非常にスムーズでしたね。

小室 そういう点では、僕から米山さんへもスムーズで、ほんとにやりかけの仕事を、ちゃんと引き継いでいただけたというのはすごく有り難く感じました。所長時代の大きなイベントという話でしたが、実は僕の時

は大きなイベントは一つもなかったのです。一五〇年のいろいろな展覧会とか出版は、全部米山さんの時代ですし、福沢事典も米山さんの下で作業が進み完成したわけです。もちろん次の資料集の本編もそうですけれど。そういうのを本当に、スムーズに引き継いでいただいたという感じがしますね。

米山 それは僕のときには西沢さん、都倉さんが専任でいるということが、基本的にはすごく大きなことでしたね。

小室 ただし米山さんがおっしゃっていたように問題もあって、二人とも有能ですから、塾内のいろいろなことに、非常に便利に使われてしまうのですね。塾内のいろいろな部署が、パンフレットなどの枕に何か福沢・塾史関係のを持ってきたとか、それで色を付けたいとか思うときには、すぐにあの二人を引っ張りだして使ってしまうとします。二人とも有能ですから、それをこなしちゃう。そのために非常に忙しくなっている。それが大きな問題ですね。

小泉 私、言語文化研究所との関係もあって、あそこの兼担所員でもあったわけです。やはり言語文化研究所ではかなり個性のある人が多くて、体質みたいなものがあるような気がするんです。外から見ているからわかりませんが、非常に個性が強すぎる人が多いと。福沢研究センターに個性のある人がいないというのではなくて、むしろエゴイステイックでないという。これは非常にいいんじゃないかな、という気がいたしますね。お互いに何か一つ、支え合う。そういう思いが根底にあるような気がするんです。

小室 坂井さんの時には、『書簡集』の作業の後に、しょっちゅう一緒に飲んでました。そんなこともあって、飲みたい思いで支え合っていましたね（笑）。

岩谷 飲まなければだめですか（笑）。

小室 ただ、専任所員が、エゴイステックでないのはいいのかもしれませんが、しかし、福沢研究センターは便利なところなので、過剰にいろいろなことに巻き込まれてしまう可能性はどうしてもあると思います。一五〇年の準備のときにも、いろいろな動きがあつて、便利にセンターが使われた面はあります。

例えば記念出版に関しても、現在編纂が進んでいる『資料集』ではなくて別の記念出版の企画があつて、それに協力してもらいたいという要請もありました。いろいろと議論があつて、最終的に現在の『資料集』に統合されましたが、まかり間違えば、二つの記念出版事業にかかわらなければならなかったわけです。

それから、記念出版の準備をしながら、同時に展覧会の話が出てきました。展覧会の開催も必ず要請されると思つて、塾監局の一五〇年事業準備委員会から話がある前から、センターの担当能力に見合った規模の展覧会の企画を進めていました。そこにカタログがある展覧会で、横浜の県立歴史資料館で開催するという企画を立てていたのです。しかし、一五〇年の準備委員会のほうで、いろいろな関係者が加わることにより、だんだん大きな話になってきて、国立博物館でも別の展覧会を開催するという話になってしまった。『義塾史事典』を編集しながら、そんな大規模なものを準備するのは、福沢研究センターの力ではかなり無理があります。

もちろん、センターとは別に展覧会の実行委員会が組織されたのですが、しかし、コンテンツに関しては、実質上は、ほとんど福沢研究センターが担わなければならない。最後のセクションに美術の展示もあつて、そのセクションは美術関係の方が担当しましたが、それ以外は福沢研究センターが用意しなければならない。そのご苦労を、たぶん米山先生はさんざんされたと思います。そのように、センター外部の塾の動きによって、使われざるを得ないということがどうしてもありますね。ですから、西沢さんと都倉さんはご自分の研究にエゴイステックなくらいで丁度よいのではないのでしょうか。

米山 まあ、福沢研究センターの蓄積というのは富田（正文）先生の時代から連綿としてあるわけで、もつと言えばそれは石河幹明さんの時代からあるわけだから、蓄積は他とは比べ物にもならないということはありませんね。

センターの果たす役割について——その“ウチ”と“ソト”

岩谷 先ほど小室先生からセンターは周年事業に巻き込まれやすいので、その一方で自立性を確保していくことが大事であるというお話がありました。センターの前身である塾史編纂所、編纂室のときの『慶應義塾百年史』の編纂もたしかに周年事業ではありましたが、塾史、学校史という歴史を扱う特別の部門という役割だけではなく、今は慶應義塾自体のアイデンティティーを確認する場所でもあるようになってきたようです。いろいろな部署から引く手あまたに、まさに日常的な業務の一環として、西沢さんや都倉君が慶應義塾や福沢のことを、きちんとした資料的裏付けの下に物語り、広めているというのでしょうか、そういう役割も今はあるようです。慶應がさまざまに国内外に広がっていく現代に、センターの役割もこの三〇年の間にずいぶんと変わってきたように思うのですが、いかがでしょうか。

小室 福沢研究センターという日本語のセンター名と、Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studiesという英文のセンター名。その二つを持っている矛盾というか、二足わらじの問題はずっと続いていると思います。福沢研究センターというと、外からは福沢研究や塾史研究をやっているいいんだと見られると思いますが、英文のほうでいうと福沢記念の近代日本研究センターだということになります。考えてみると慶應義塾

に歴史の研究所というのは他にないので、そういう意味では慶應義塾の唯一の歴史研究所として、仕事をしていかなければならない面は絶対にあると思います。

是非そうであつたほしいけれども、その一方で周年事業もやっていかなくてはならない。そのジレンマがあると思います。早くも、坂井さんのときに一五〇年事業検討委員会が立ち上げられて、そこでは、『一五〇年史』を編纂するのは難しいということでは意見が一致していました。ただ、そうではあるのですが、ある委員が、「しかし、そんなことを言つたつて、ねじ伏せられて絶対にやらされるぞ。だからそのための準備を何かしておかなくちゃいけない。そうじゃなかったら福沢センターはなくなっちゃうぞ」といった趣旨の注意をしていました。実際そういう面はあつて、歴史研究所でありたいけれども、それだけでは済まされないというところがあると思います。

小泉 宿命みたいなものです。でも、それだからこのセンターの意義ということで、二つの活動を同時にやっているんですね。ますますそれが高められていくのではないかな。もうよそ者だから勝手なことが言えますが、本当にそう思えます（笑）。言語文化研究所を見てみると、各人が独自の研究をやっています。それ自体は素晴らしいけれども、慶應義塾のほうから見ると非常に冷たい目で研究所は見られているんですよ。その中でどういうふうに働いていくかは、今度は現所長のこれからの働きで変わると思いますけれど。

岩谷 もう少し座談会は続きますので、本日は諸先輩方からのお話を伺わなければいけないのですが（笑）。米山 外に開くという意味では、小室さんのときに『近代日本研究』を査読誌にすることをやられたわけですね。まさに福沢センターの紀要が『近代日本研究』という名前だということが、さっきの二つの側面を象徴しているんだと思います。それを外に開く形にした。投稿してくるものについていうと、必ずしも福沢とか慶

應義塾を対象にただけではなくて、近代日本研究に関わる他のものもけっこう投稿されてくるようにはなっています。うまくいつているかどうかは編集長の平野さんがよくご存じだと思いますが（笑）。そういったところで、外に開く努力はしていると思います。

小泉 これは一つの提案になるかどうかわかりませんが、言語文化研究所の一つの企画として古代語研究があります。松本正夫先生が副所長だったときに始まったんです。どういうものかというところ、ヘブライ語、アラム語、シリア語、ギリシャ語ですね。こういったものによる聖書研究、旧約研究をやるうというので始まったわけです。四三〜四四年ぐらい前です。上智大学のカール・ヴァンケンホルスト先生をお呼びして、あの当時助教授でしたけれど、非常にできる方です。この人を中心にして、研究会を始めたんです。ここで上智大学に行ったり、東京神学大学に行ったり、今は東京神学大学の太住雄一先生という、旧約学の先生のご自宅を開放していただいて、そこでやっているんです。

そういうようなことをやっていますが、そういうような形が福沢、あるいは福沢研究だけではなくて、日本の近代史を中心とした研究会みたいなものをつくって、それをインターカレッジで継続的にやっていく。こうした研究者同士が集まってきてできるようなシステムができるか、できないか、こんなこともいがかかと思えます。そんなことも一つの方法かなと思います。

私は八六歳九か月ですけども、まだ頭がほけないんです（笑）。こうした研究会で学んでいるからです。本当ですよ。そういう老人教育というものを、お考えになってもいいかなという気がします。今までの福沢センターのお仕事は非常に素晴らしい。聞いているだけでも、これは素晴らしい有意義な活動をセンターが担ってきた。しかしもっとプラスすると思えば、そういった面もできるかなという気がいたします。

岩谷 最近では海外の日本近代史研究者、あるいは福沢を視野に入れた研究者との交流も盛んになってきています。そのあたりの研究の枠組みが、きちんと福沢研究センターの活動の中に位置づけられていくといいかなと思っています。

小泉 先ほどお渡しした論文は、University of Nottinghamの学会誌掲載論文です。はつきり覚えていないのですが、Asian Philosophy Associationとかいうものができています。この関連も海外との協働といったものも、視野に入れられるといいかなと思います。これはハーバードにもありますし、あっちこっちにあると思います。

小室 そういう点では西沢さんは韓国との交流をかなりやっていますが、今いちばん心配なのは英語圏の福沢研究者が育つてないということです。カーメン・ブラッカーさんが亡くなって、クレイグさんもお年です。そのあと英語圏の福沢研究者は育つてないんです。そこがうまく育ってくれるといいなと思います。

岩谷 若い英語圏の研究者をこれからもどんどん慶應に招いて、近代日本、福沢、慶應義塾についての研究や講演をしてもらう。まずはこちらが呼びかけなくてはいいかもしれませんね。

小泉 研究費が何かがあれば三か月来て、ここで勉強していただくとか。そういうことができれば。今後の問題になってきますけれど。

米山 訪問研究員の希望というのは、僕が所長をしているときにもありました。それは外国からもありましたし、国内からも国内留学のような形で席を置いて、という希望が、年に一、二件ぐらいはあるのではないかなと思います。ただ、それが福沢研究センターでは学部と違って、あまり条件がよくない。学部の場合だと例えば研究室が確保されているとか、いろいろな条件があるのですけれども、それがセンターにはないのです。訪

問研究員を受け入れる体制もつくっていったって、講義してもらったり、あるいは研究してもらったり、僕らと交流ができるような形になっていくと、たぶん若い人たちも育っていくでしょうし、いいだろうと思います。

岩谷 それは義塾の中の諸研究所の扱いが、特に学部と比較して及ばぬ点が多くあるということです。

米山 たださつき小室さんが言ったように、研究所は原則として教育には携わらない。しかし、研究所でも日本語・日本文化教育センター、教職課程センター、体育研究所は教育なしでは成り立たないところだと思います。そういったところも含めて、それぞれに問題があつてどうしても学部との間にさまざまな格差があるので、研究所間相互の意見交換や情報交換をやっていく必要があると思います。以前、中川（純男）さんが言語文化研究所の所長だった頃は、中川さんのところで少し取りまとめようかという話があつたのですが、なかなかうまくはいきませんでした。

それと、研究所は専任所員の研究条件、例えば留学についてもなかなか難しいんです。義塾派遣の留学制度は、研究所にはなく、福沢基金だけなんです。福沢基金は若い人は採れるけれど、少し年齢がいくと採れないという問題があります。できれば留学ができるようにしたいというのは、僕が所長の頃から思っていたことではあるのですが、なかなかうまくいかない状況です。

ユニバーシティ・ミュージアムについて

平野 ユニバーシティ・ミュージアム構想みたいなものが最近また出てきましたね。
坂井 あれがまた出てきたのですか。

平野 ええ、そうですね。

坂井 あれは僕の知ってるだけで、今まで四回ポシャっている（笑）。

岩谷 五回目ですか。

平野 あればいいと思いますが。

小室 そうですか、また話が出ているのですか。

岩谷 ユニバーシティ・ミュージアムの実現が困難なのはどのような理由があるのでしょうか。やはり物的な資源に乏しいということでしょうか。

坂井 私の知っているので最後に出てきたときは、博物館とはどういうものかという、その基本的な理念が全く噛み合わない。造れと言いつつ出したときの理事は、この間亡くなった高橋潤二郎さんだったかな。彼は、バーチャルミュージアムにしようと言ってますよ。そうすればスペースもそれほど要らないし、いろいろなところだけじゃないかというのですね。

だけれど私などの意見は、バーチャルの部分があってもいいけれど、やはりものが実在しなければだめだと。私と高橋潤二郎さんと、それから民族考古学の近森（正）さん、確か三人で話をしたときに、私とか近森さんは、ものもなきや、映像だけあつたつてだめだと。映像の良さというのものもあるけれど、実際のものを触ったりできなければ、それはだめですよと言いました。

例えばものを展示するスペースをひとしても、展示すべきものを収納して置くスペースが背後にその何倍も必要なわけです。映像だけだったら、そんなものは要らないでしょう。だからそこで話が食い違って先へ進まないんですね。

センターの「これから」

岩谷 先ほど当センターには日本語表記の福澤研究センターと英語表記の Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies という二つの側面があるというお話がありました。その後者の部分は今後どうなるのかということについて伺いできればと存じます。もちろん今後とも福沢関係の資料は発掘・蒐集されてゆくべきであることは言うまでもないことでありますが。

平野 私の記憶の中では、内山先生が特に近代日本研究の側面を強調されたような印象がありますね。たぶんセンターの所員の先生方の中でも、福沢研究と近代日本研究と、どちらにウエイトを置かれているかというのは、その先生によってスタンスの違いは若干あるのでしょうか。

岩谷 先ほども小泉先生からありましたように、全学部的な機関であるということが風通しをよくさせているというのでしょうか。いろいろなものを、それぞれの学部の事情とか因習に囚われずに伝え譲り渡していくしやすい空気をつくっているようにも思えるのですが、いかがでしょうか。それぞれの学部の歴史部門はなかなか難しい状況に置かれている中で、この福沢研究センターがまさしく歴史研究センターとして、ますますその性格づけを際立たせていくんじゃないかと思っています。

平野 最近では、各学部とも人事交流というか、いわゆる慶應生え抜きでない先生たちが増えて、歴史の教員でも、かつてに比べると塾史とか福沢に対する思いはそれほどない方も増えていらっしゃるでしょう。逆に言うと、そういう先生方を呼び込んで、学際的なセンターになっていくといいなと思っています。

坂井 文学部からいま委員ではどなたがおられるのかな。

平野 井奥（成彦）先生ですね。

坂井 井奥さんですか、なるほど。

小室 僕自身は福沢研究センターに関係することができて、非常に良かったなと思っていますけれど。ただ僕の若いときの経済学部で、福沢研究に対してはわりと冷淡というか、距離を置きたいという雰囲気がありました。僕の師匠の島崎（隆夫）さんなんかも、あまり近づかないほうがいいみたい（笑）。はっきりそうは言いませんでしたけれども。

塾史編集室のときのイメージがあるのか、そこらへんはよくわかりませんが、そんな雰囲気です。だから僕も福沢研究センターの所員にしていたくまでは、本当に全然福沢なんて知らないというような感じだったんです。所員にしていたら、福沢のものを読む機会ができて、「こんなに面白いのか」ということがわかりました。そういう点では外の大学から来た方でも、どんどん所員に引き込んで面白さをわかってもらうといいかもしれないですね。

小泉 人員について兼担所員みたいなものに制限があるんですか。

坂井 ないですよ。

岩谷 特にないですね、処遇上のものについては。

米山 規程上はないです。よく内山さんが言っていたのは、ここは慶應義塾大学福沢研究センターではなくて、慶應義塾福沢研究センターなんだから、一貫教育校も含めて、塾内共同研究施設なんだというような言い方をしていた。前に比べると一貫教育校からの委員も、少なくなっているのかなと思います。

岩谷 それはやはり慶應義塾の中での連携を図ってゆこうということですね。

米山 そうなんでしょうね。

岩谷 内山先生はそういうふうに考えておられたということでしょうか。

米山 大学だけの機関ではないんだというようなことは、よくおっしゃっていました。だいたい飲んだ席でしたけれど（笑）。

岩谷 どうしてか飲まない（笑）。

平野 そういった意味では今回、志木高校の大塚（彰）先生に『近代日本研究』の編集委員に入っていたただいたのは、非常によかったと思います。

岩谷 米山先生のときから始められた、未来先端基金による中津の古文書講座は、塾内校の先生方との連絡、連携を図りやすい機会になりましたね。

米山 以前から中津でやっている講座に、センターに関わっている院生たちが行ってなじみになっていたりしたので、最初は福沢研究の後進を育てることを考えました。ただ以前に学生部がやっていた大学生生活懇談会で、よく大阪に行ったり、中津に行ったりしていたじゃないですか。あのようなのもうなくなっているの、せっかくセンターで講座もあって、日吉や三田で関心のある子たちが取っている。そういった人たちが中津に行く機会があつて、少しでも資料に触れる機会があるのかなと思つて、未来先端基金が教育基金だったので、出してみたら通つたので始めました。将来計画として一貫教育校の生徒にも参加してもらつたことを考えたのですが、結局初年度から何人か高校生が参加しました。今年は高校生が多かつたと聞いています。

岩谷 一貫教育校の先生でも福沢や慶應義塾のことを知りたいという、先生ご自身のご関心からそういう企

画に参加したいという方も現れてきました。そうした慶應義塾内のいろいろな部署との連携を、図っていただいたいなと思っています。

小室 確かにいま一貫校の先生の所員は少ないですね。志木高の松崎さんも辞められて、幼稚舎の岩崎先生もご定年だし。

岩谷 おっしゃるとおりですね。

平野 日吉の「近代日本と福沢諭吉」講座を受講している学生には、けっこう薬学部 학생들이……。

米山 多いです。

平野 逆にそういう学部のほうが、関心が高いですね。

岩谷 またこの五月に大阪シティーキャンパスがオープンしましたから、そこにも出向しております。慶應義塾の名前の及ぶあらゆる場所に出張し、講演・講義をしている。もちろんこれは西沢さん、都倉君だけではなく、センター所員、それにセンターに連なる方々全員総出で事に当たっている次第であります。

米山 西沢さんが持っている選択講座の一つの講義は、院生を主な対象にしています。なかなか院生だけでは成立しないので、学部の学生も対象にしていますけれども。大学院レベルの授業も開設しているので、もう少し院生が育ってくるのかなと思います。

岩谷 大学院の授業がセンターの中で開設できるのですね。

米山 そうですね、独立した形でセンターが大学院レベルの授業をすれば。いま単位の扱いとして自由科目になっているのですが、その位置づけみたいなものも各研究科で変わってくると思います。

小泉 ミシガン大学に三〇代前半で二年ばかり行って、哲学科に入って勉強しました。向こうはジョン・ス

チュアート・ミル、それからデューイですね。この二つが基本になっているわけです。私がミルを研究する、あるいはデューイを研究する、この場合に日本人として理解するということはいったい何だろうか。明治の一〇〇年前に福沢先生がミルを理解した。それとどういうふうな違いがあるか、同じものなのか。そういったことが私の関心でした。

帰ってきて、それをずっと比較してるといふ感じで勉強していますが、そういう関心を持っている人はないですかね。福沢センターは非常に素晴らしいことで、私は非常に影響を受けているわけですが、こういったちよつと毛色の変った考え方で勉強している人がいれば、私も多少お手伝いができるかなという気もしないでもないです。向こうで非常に新鮮に感じたんです。いったい我々は日本で外国のものを勉強して、本当の意味で例えば英国人が理解するように、私たちは理解しているのかどうか。基本的なそういう姿勢ですね。それをもっと掘り下げなければいけないと、私は思いました。これはどんな思想に関してもそうですね。

その点、福沢先生が明治に最初に西洋と出合つて、そしてそれを受けて咀嚼しようとしている。しかもまた日本の思想というものを、どういうふうに維持しつつ、それを理解していくか。このへんの実体的な構造にたいへん興味があります。それは今でも同じじゃないかという気がしているわけです。

岩谷 まだまだお話は尽きぬかと思いますが、そろそろ時間がまいりました。先生方、本日はお忙しい中、本当にありがとうございます。

(二〇一三年九月一八日収録)